

## 書評

小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編

『中国ジェンダー史研究入門』(京都大学学術出版会 2018年 486頁)

# 誰がためにジェンダー秩序はあるのか

迫 田 博 子

本書は、中国ジェンダー史研究の全体像を提示した初の入門書である。先秦時代から現代にいたるまで、中国におけるジェンダー秩序の変容をたどりながら、「中国史をつらぬくジェンダーの諸命題やその実態の変遷」を明らかにした。本書のキー概念ともいえる「ジェンダー秩序」について、書中では次のように定義している。「ジェンダー秩序」とは、「ある社会において女性や男性の関係を規定する諸制度（ジェンダー・レジーム）と、そのような関係を生きる人々の日常的な実践のあいだで構成されるような全体秩序のこと」（第14章）をさし示す。

また、本書は2012年から活動を開始した、東洋文庫現代中国研究資料室のジェンダー資料研究班による「中国ジェンダー史共同研究」の結実でもある。これまで、日本における中国史研究はジェンダー視点が乏しいうえ、中国のジェンダー秩序に関する「全体的な見取り図」が描出されていないという問題意識にもとづき、中国史におけるジェンダー構造の特徴と変遷の全貌を明示することを目的としている。

本書は、二部構成の全十八章および六つのコラムからなるが、構成にも研究のスタンスがあらわれている。第一編では「家族構造」を軸として、長きにわたる中国のジェンダー秩序の変容過程を通時的に論じている。時代を三期に分け、すなわち、「Ⅰ期 先秦～隋唐 古典中国——父系社会の形成」、「Ⅱ期 宋～明清 伝統中国——ジェンダー規範の強化」、「Ⅲ期 近現代中国——変容するジェンダー秩序」である。続く第二編には、中国ジェンダー史において重

要な個別のテーマや「各時期に通底する課題」を扱う。また、本書を読み進めていくうえでの手引きとして、きわめて大切な六つの論点を提示している。①中国の家族は、ずっと強固な父系制だったのか。②中国近世のジェンダー秩序は、日本近世のそれとどう違うのか。③中国における「男らしさ」の特徴は、どんなものか。④中国では、「近代家族」は成立したのか。⑤中国の社会主義は、女性の地位を向上させたのか。⑥LGBTにとって、中国は生きやすい社会か。如上の観点に導かれ、読者は本書をより深く理解することができるだろう。

次に本書の内容について、もう少し具体的にみてみよう。現代まで続く中国のジェンダー構造は、歴史を遡ること、先秦時代の数千年の間に大きな変化が生じていたという。墓葬資料（墓の規模や副葬品の内容など）から推測すると、新石器時代中期・後期には男系血縁集団を中心とした父系社会へと転換している。また、男女が担当する職掌が分化し、「男耕女織」（男は耕し、女は機を織る）の状況が確立した時期でもある。西周時代の貴族社会では、氏族同士の婚姻が政治手段として用いられていたため、女性の重要な役割は婚姻であったとされる。さらには、初期王朝時代において、「文字を使う政治システムの中核を男性（史官）が独占」して操り、その流れは後世にも引き継がれ、男性が政治活動を独占して行う一因となったのではないかと指摘している（第1章）。

男性が独占していたのは政治面だけではない。文字文化が男性によってほぼ独占されていたため、文学創作に携わるのはおおかた男性であった。中国詩文の「閨怨詩」と称されるジャンルに焦点をあてると、男性の書き手によって「もっぱら性愛の対象として、従順で哀しげな「待つ女」が描かれている。だが、女性が書いたとされる詩文（先秦時代～宋代）を通覧すると、必ずしも男性のまなざしに即したステレオタイプの女性像ばかりでないことを明らかにしている（第3章）。女性自身による文学的営為がなされた例は、清代・士大夫家庭の詩作する「閨秀」たちの活動からもみることができる。彼女たちは家庭内の職責を果たすかたわら、著述などを通して自らの社会ネットワークを構築していた。主体性を持ちながら多様な知的活動を行う「閨秀」の姿は何を物語っているのだろうか。中国前近代の女性たちは抑圧され、脆弱な立場に置かれていた存在だけではないと解釈の幅を広げることができよう（第16章）。

ところで、正史や絵画などの中国の史料から歴史的社会的現実——とりわけ

女性の社会生活の実態や諸側面を把握するには困難が伴うという。なぜなら、男性主体の記述や儒教的価値観に沿った理念がバイアスと化し、史料にかけられていることが多いからだ。このハードルを飛び越えるべく、小説史料からのアプローチによる考察がなされている。南宋『夷堅志』（洪邁）、『名公書判清明集』（編者未詳）、『袁氏世範』（袁采）には、無能な夫にかわって家業を切り盛りする女性、農家経営で複数の役割を担う女性や自活する寡婦など、現実生活にたじろぐことなく奮闘する女性らの活躍ぶりが叙述されている（第5章）。先述の「男耕女織」は、伝統的な中国社会における性別分業規範の理念である。しかしながら、実のところ現実と理念の間には隔たりがあることが浮き彫りとなった。

『礼記』（内則）「男は内を言わず、女は外を言わず」とあるように、かような男女内外を特徴とする儒教的理念は、近代の家族のありかたにも表出している。家族や婚姻制度に関する議論が最も盛んになされていたのは、おそらく清末から1920年代であろう。背景には、内憂外患に揺れていた中国は、近代国家建設の基礎を家族改革に求める動きの高まりがあった。「伝統的な家族制度の打破」や「近代的家族制度の構築」をするために、新たな家族像として「小家庭」制が提唱された。だがこれによって家族や両性関係に大きな変化が生じたかといえば、そうではないようだ。「小家庭」制を概観すると、家族を統括するのは夫であり、妻は下位に位置づけられている。また、「男は公共領域、女は家内領域」というジェンダー分業が固定化されることとなり、伝統的な家族制度の改変につながるものとはいいがたい（第11章）。

興味深いことに、歴史を遡行すると、中国古代の「戸人（戸主）」制度にも「小家庭」制と似通った部分を見出すことができる。戸籍制度は戦国時代に発祥したものといわれ、「戸籍」とは居住をともにし、かつ主な財産である不動産を共有する（同居共財）生計単位をさす。「戸」の代表者は「戸人」であり、官への登記手続きなど対外的な面での役割を担う。妻は「戸人」となることはできず、「妻は内、夫は外」という内外の役割が明確に区別されていた。換言すれば、戸人制度は性別なるものによって公私の役割が定められているだけでなく、「尊卑の関係を固定化する機能」をも有していた（第15章）。時代は違えど、「小家庭」制と「戸人制度」には「公的」役割と「家庭内的」役割という

二項対立のカテゴリーがみられ、なおかつ、それによって明白な境界線が生じていたのではないだろうか。

近代中国の男性性に着目した論考をみておこう。社会が男性に対して「どうあるべきで、どうふるまうべきか」を要求し、その期待に応えることではじめて男として認知される。この社会的な期待こそ「男性性」だと説く。中国の伝統的な男性性は「文と武」によって構成されるが、「文武の関係」の変遷に関する論考を次のごとく述べている。清代の漢族社会は文へと比重が傾くが、他方で、支配者の満族は多数の漢族を支配するためには武によるほかはなかった。民国時代には、陳独秀は「文」の根幹である儒教を批判し、「武」を提唱した。鍛えられた体こそが男性性に不可欠な要素とされる。また、日本の侵略や共産党の脅威に直面した国民党は、独自の男性性をめざし、黄浦軍官学校に代表されるような軍事的男性像を掲げた。近代中国にとっての大きな課題とは「女性化した中国をいかに再男性化する」ことであつたがゆえ、文武両者の関係は、「文高武低」から「文低武高」へと移行したと指摘している（第10章）。社会から期待されている「あるべき姿」が男性にとってどのような意味を持つのか、という問いを投げかけられているようだ。

以上にとりあげた論述のほかにも、「尚公主制度」（第2章）、台湾の学界動向（第4章）、伝統家族のイデオロギー（第6章）、貞操観念（第7章）、身分感覚（第8章）、中国近代のナショナリズム（第9章）、近現代の女性労働（第12章）、中華人民共和国の婚姻法や貫徹運動（第13章）、婦女運動（第14章）、医学と身体（第17章）、中国女性学（第18章）など、多角的な観点をういた論稿を配している。本書の意義を考えれば、中国のジェンダー秩序は歴史的に変化するものとして動態的にとらえ、加えて、その変容のプロセスを多面的に示した研究であるということがあげられるのではないだろうか。

最後に私見を述べたい。この書で知得した中国ジェンダー史の諸事象を俯瞰すると、いかに思想やイデオロギーが人間のありかたを規定し、社会の諸制度をも強制的に決定付けることが鮮明に浮かび上がる。ジェンダー規範はいわば、透明な合意形成として社会に存在し、のみならずして、人々もまたそれによってマインドセットされてきたといえまいか。また、本書で再三指摘しているように、従来の中国史研究の対象は漢族の知識人男性を中心にすすめられて

## 誰がためにジェンダー秩序はあるのか

きた。ゆえにジェンダー研究は、女性や未婚の男女、少数民族、文字の読み書きができぬ人々など、これまで「歴史の中において客体化されてきた人々を可視化し、かつその視点から再度歴史をも問い直す」ことの重要性に言及している。ひとりひとりが社会的な存在であるにもかかわらず、歴史の死角には追い払われた人々が潜み、あらためて「個」としての人間をとらえる視座に欠落していたことに気づかされる。ジェンダー視点を研究に取り入れることは、既存の知的枠組みにとどまることなく、複眼的な視座を持ちながら事実確認の再構築をする試みだといえるのかもしれない。

本書の今後の課題のひとつとして、さまざまなジェンダーやセクシュアリティのたどった道のりを明らかにしつつ、ジェンダー秩序全体の歴史をより明確に示すことをあげているが、今後の研究が待たれるところである。内外の知見や研究動向が豊富に収められている本書が、この先さらに多くの読者を獲得することを願っている。